

2025年 2月 浜松聖書集会のご案内

(時間: 午前10時 ~ 正午)

○ 2月 2日 (日) 集会 (アクト研修交流センター36セミナー室)

司会: 岩田 堯

聖書講話: ミカ書 6章9~16節

「神に背く国と民の姿」

水戸 潔

○ 2月 9日 (日) 集会 (アクト研修交流センター36セミナー室)

司会: 笹井 あかね

聖書講話: 章 ~ 節

「 」

永井 徹

○ 2月23日 (日) 集会

司会: 大手 美千代 (アクト研修交流センター36セミナー室)

聖書講話: ヨハネの黙示録 17章

「大淫婦 あの大きな都が裁かれる」

武井 陽一

目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである 溝口 正

15 —見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩くのを見られて恥をかかないように、

目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである。—— ヨハネの黙示録16章15節

この節は傍線(一一)で括られている。ここに告げられているのは、主の再臨(最後の審判)に備えるための信徒に対する最も重要なメッセージである。著者ヨハネが霊に満たされて幻を見ている途中で、一瞬「我」に返って書いたものと考えられる。

主の再臨が近づいたのと告げられると、信徒の中には浮足立って、その日はいつかなどと期日ばかりに気を取られて最も重要なことを忘れがちである。しかしそうであってはならない。ヨハネはかつて、イエスが地上におられたときに語られた御言葉を思い出して、再臨を待つ信徒の態度について改めて注意を喚起したのであろう(テサI 5・2、ルカ 12・37、マルコ 13 等参照)。即ち、再臨の主は、盗人のように予告なしに来られる。これは、すべて神の御一存でなされることであって、人間の関与できることではない。したがって、いつ来臨されてもいいように信仰の目を覚まして待ちなさい、ということである。「裸で歩く」とか「衣を身に着ける」とかの言葉は、十字架の恵みであるキリストの衣を着て、日常生活を赦された罪人として生きることであり、信仰の目を覚まして歩むことを言っているのである。 『復活』376号 1998年3月